

# 月やあらぬ

——伊勢物語の藤原高子・私説——

辻 憲 男

*Tsuki ya Aranu : A Note on Takaiko Fujiwara in Isemonogatari*

Norio TSUJI

【要旨】伊勢物語第四段の読解を起点として、いわゆる二条后物語の形成の問題について私見を述べる。藤原高子に対する在原業平の恋は当初から失われたものとしてあり、その「月やあらぬ…」の歌の構想が即ち物語全体を貫く主題の典型である。色好みの男が終生忘れ得なかった、「月の桂」のごとき高貴の女性。その人への渝らぬ忍びやかな恋の心が、物語作者の実現した古風な「みやび」の情調の基底にあったと考える。なお本論のあとに、高子の願経「不空羅索神呪心経」の願文（識語）についての略注を付載した。

【キーワード】伊勢物語、在原業平、藤原高子（二条后）、不空羅索神呪心経

## 二条后物語の構成

伊勢物語第四段の物語性の検討を通して、いわゆる二条后物語の形成の問題について年来の疑問を書きつけておきたい。「月やあらぬ…」の第四段は、愛する高貴の女性がにわかに姿を隠し、一年後に男が元の対屋を訪れて昔を恋いしのお歌を詠んだとする一話であるが、古雅平淡な語り口のうちに忍びやかな抒情と余韻を湛えている。この物語の基調をなす「みやび」の情調の、尤なる一典型とすることができ。

伊勢物語の中にはこれに関連する話が、

三、四、五、六、二十六、二十九、\*五十一、六十五、七十六、百、\*百六

(\*を付した二段は明示がないが、他書の記事により〔参考〕として挙げる)

などの諸段に見えている。これらの二条后系の物語群は、昔男の一代記を構成する柱として最も重要な一つである。それは物語の始めから、前半、中半、後半部にまで年長く、間歇的に反復出現する。その中でも、第三―六段は年若い頃の二人の交渉を、第二十九段や第七十六段は入内後の女御と男の再会を、そして第百段は后となった貴人との昔語りを記している。これらの話の背後にあったのは、かの藤原高子に係る、

貞観元年(八五九)十一月、五節の舞姫となり、従五位下に叙位、十八歳。前年十一月清和天皇即位。太政大臣良房、摂政となる。

三年(八六一)二月、五条后順子、大原野神社に行啓。高子も従ったか。

八年(八六六)十二月、入内、清和天皇の女御となる、二十五歳。

十年(八六八)十二月、貞明親王誕生、翌年二月立太子。東宮の御息所となる。

十二年(八七〇)九月、次子貞保親王誕生。その後、敦子内親王誕生。

元慶元年(八七七)正月、貞明親王即位し、陽成天皇。中宮となる、三十六歳。

四年（八八〇）十二月、清和太上天皇崩。兄基経（良房の猶子）、太政大臣となる。

五年（八八一）五月、不空絹索神呪心経を興福寺南円堂に納める。

六年（八八二）正月、皇太后となる。三月、四十賀。

八年（八八四）二月、陽成天皇廢位により、二条院に移る、四十三歳。

といった史実である。物語は歴史ではないが、しばらくその間を往復してみる。右によれば、今の第四段は貞観初年以前の、第二十九段・第七十六段は貞観後期の、また第一百段は元慶以後の出来事として定着したごとくである。（参考）とした第五十一段の「菊」は、大和物語第六十三段の同じ話に「後の宮より」とあるので、第一百段などと同類と見なされる。同じく第一百六段の「ちはやぶる…」は、古今和歌集の詞書に「二条后」「屏風歌」とあるのによる（秋歌下・二九四）。ただし業平は高子より十七歳年長で、元慶四年（八八〇）五月に五十六歳で没した。現実には「月やあらぬ…」の歌は中年の男のやるせない未練であったことになる（貞観六年に四十歳）。それを物語の始め近く、初冠の続きに（若年の話のごとく）置いたのは、年代記としての体裁を整えるためであったのだろう。昔男の若年の恋愛譚は意外に数少ない。

第七十六段の大原野行の時に主人公は「翁」と呼ばれている。史料とつき合わせるに、高子が「東宮の御息所」であったのは貞観十一年から十八年までである。この間の高子自身の行啓は記録に見えない。先の貞観三年の順子の行啓に高子も随行したかと思われるが、当時はまだ「ただ人」であり、業平も三十七歳である。礼参のような目的があったとすれば、当年十一年中である可能性がある。同年三月に男棟梁が東宮舎人となり、右馬頭業平も相供奉したかとも思われるからである（四十五歳）。しかし「近衛府に候ひける翁」は警護役であり、「人々の禄給はるついでに」である。業平が右近衛権中將になったのは同十七年なので、もしこの年だとすると東宮八歳、高子三十四歳、業平五十一歳の時になる。

また第二十九段の花の賀を高子の四十賀とすると、業平の没年を越えてしまう。もとより作品の設定年代は史実と合わず、主人公は実年齢よりも若く長生である。そこで大和物語を参考するに、在中将の話は後部第百六十一段から百六十六段にかたまっている。二条后にかかわるのは前の三段である。左に伊勢物語の章段と対照し、古今和歌集の収載を注記する。

百六十一（ひじき藻、小塩山） 伊勢三、七十六 雑上・八七一

百六十二（忘れ草） 伊勢百

百六十三（菊の根） 伊勢五十一 秋下・二六八

百六十四（飾りちまき） 伊勢五十二

百六十五（つひに行く） 伊勢百二十五 哀傷・八六一

百六十六（女車） 伊勢九十九 恋一・四七六（四七七）

伊勢物語にくらべると、情調性よりも説話性が高まる。たとえば大和百六十一段は、ただ人であった頃の話に、大原野参詣の話が続けたもので、元の伊勢物語ではこの二話は直接の繋がりが無い。それらが大和が結び付けたのは、男が、大原や小塩の山も今日こそは神代のことを思ひ出づらめ

の歌の「神代のこと」に后との過去を暗示したと語るためである。昔ひじき藻の歌を送り、今は単衣の御衣を与えた。男は声を憚って「しのびやかに」答えた。歌の「思ひ出づらめ」の主語は小塩山なのだが、これを聞いた后が「昔を思し出でて、をかしと思しける」とある。「をかし」は大和らしい付加である。この趣向は大和第四百四十八段の蘆刈説話を思わせるものがある。

伊勢物語第七十六段では、翁は相見えることのない懸隔をしみじみと実感する。女のほうも終生忘れない。「神代」とも思われるほどに遙かな昔の恋である。「心にも悲しとや思ひけむ、いかが思ひけむ、知らずかし」。例の、多くを

言わず読み手の心に委ねる韜晦である。主題は心ならずも絶たれた激しい恋の名残である。<sup>(3)</sup>

第百段はそのような恋を忘れ草に言寄せる。地の文に、

昔、男、後涼殿のはざまを渡りければ、あるやむごとなき人の御局より、「忘れ草を忍ぶ草とや言ふ」とて出ださせたまへりければ、

と、貴人から深長な問いかけがあり、男が、

忘れ草生ふる野辺とは見るらめどこは忍ぶなり後も頼まむ

とわが身のこととして得意即妙に答えた。男の今の心を波立たせる貴人の心憎い「みやび」である。二条后物語の余香のような終章である。

#### 高子と在中将

物語の背後にある史実、それを超えて語ろうとすることの意味は何であろうか。まずは第五段「関守」と第六段「芥川」の記述であるが、それぞれの話のあとに、

二条后に忍びて参りけるを、世の聞こえありければ、兄人たちの守らせたまひけるとぞ。  
および、

これは二条后の、いとこの女御の御もとに仕うまつるやうにて居たまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひて出でたりけるを、御兄人、堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて内裏へ参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめて取り返したまうてけり。それをかく鬼とは言ふなりけり。ま  
だいと若うて、后のただにおはしける時とや。

とある。事件の順序を言えば、第五段の忍び通いは第四段の失踪より前のことしか思われぬ。そして第六段のよ

うな事件が起こったので、第四段の決定的な事態に至ったのである。もしそうでなければ、月・春・わが身を慨嘆する歌が大変色褪せたものになってしまう。確かに第四段に「あり所は聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ」とあり、その所が第六段の「いとこの女御の御もと」即ち染殿後の邸であったと明かされるわけではあるが。

失踪は男の来訪を断つための最後の手段である。二条后系の物語は第六段以降、第二十八段「もろこし船までなく、そこに「え得ずなりにけること、とわびたりける」と、恋の不成就を明示している。第三段のひじき藻の歌がぶしつけないのは、相手がごく幼く物を知らぬ年頃だからであろう。皇太夫人順子が東五条の第に移ったのは嘉祥三年（八五〇）四月であり（文徳実録）、姪の高子もやがてここに住んだ。異母兄の国経は高子より十四歳年上、同母兄基経は六歳年上であるが、ともにまだ下臈であったという。高子は嘉祥三年に九歳、天安二年に十七歳であるから、実年齢と物語は矛盾しない。しかし第五段に至り、「あるじ」（順子か）が監視を設けて交際を禁じた。と、頻繁に訪れていた男から、

人知れぬわが通ひ路の関守は夜々よよごとよむにうちも寝ななむ

と嘆きの歌が来たので、女は「いといたう心病みけり」とある。心を許し、情を通じ男を頼む年頃にもなったのである。たちまち「あるじ許してけり」。娘の気持ちを哀れみ氣遣った。しかるに第六段で男は無謀な逃避行に出た。「女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、辛うじて盗み出でて」は、やはり第四段以前の事件として自然である。まことに世づかぬ、草葉の露を白玉かと問うような姫君ながら、同意の上の挙である——更級日記の竹芝伝説の皇女の軽挙が思い合わされる。場所は「率て行きければ」「行く先多く」「雷さへいとみじう鳴り」などであるから、京内ではなく摂津国の芥川を想定したものである。京から山陽道の同国芦屋をめざしたとすれば、芥川はほぼ中間地点である。

これら四つの章段は整序しているわけではない。歴史が継起的線条的なものであるとすれば、歌物語は其時的構成

的なものである。逃避行の失敗は即ち破局であり、早速に第七段から東下りの話が始まるのである。以下の「京にありわびて」「京や住み憂かりけむ」「身を要なきものに思ひなして」などは、その破局からの自然な接続を意図する。史実はいさ知らず、読み手は物語の中で失敗以外の動機を知らされていない。

さて第六十五段まで下ると、改めてこの間の事情が詳しく明かされる。在原の氏も、大御息所のいとこであることも、水尾帝の時のことにて染殿后または五条后が関わることもあからさまになる。第六十五段の初めの部分に、  
殿上に候ひける在原なりける男の、まだいと若かりけるを、この女相知りたりけり。

と、たいそう若い設定にしたのは虚構である（前述）。この段の後半は、男は恋を断ち切れず、女もわが身を激しく悲嘆するのを、

みかど聞こしめしつけて、この男をば流しつかはしてければ、

この女のいとこの御息所、女をばまかでさせて蔵にこめてしをりたまうければ、蔵にこもりて泣く。  
とまで書く。東下りを勅断による所払いとする。流離の旅の因を第五・六段とする合理解を示すのである。

### 「月やあらぬ…」の歌と語り

第四段の文章を、時の経過に従って三つに分けると、

①昔、東の五条に大后の宮おはしましたしける、西の対に住む人ありけり。それを、本意にはあらで、心ざし深かりける人、行きとぶらひけるを、

②正月の十日ばかりのほどに、ほかに隠れにけり。あり所は聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しと思ひつつなむありける。

③又の年の正月に、梅の花ざかりに、こぞ去年を恋ひて行きて、立ちて見、ゐて見、見れど、去年に似るべくもあらず。

うち泣きて、あばらなる板敷に月のかたぶくまで臥せりて、去年を思ひ出でて詠める。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

と詠みて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣く帰りにけり。

である。男の心情は、①心ざし深く、②なほ憂し、③去年を恋ひて泣く、と点綴する。③の「又の年」の孤独な追懐が帰結であり主題である。地の文の①と②はほぼ等量で、二つを合わせて、また③の地の文と同じ長さになる。①の書き出しは通例の「昔、男ありけり」の型ではなく、最先に対屋に住む女人ありけりを言う。初段から第十二段までこのような型は他にない。すぐに「それを、」とし、女性の映像は頭初から消されている。どのような人であったか、なぜ姿を隠したかは語らず、②でただ正月十日ばかりとのみ明かす。日付は事件性を表示し、また月夜と梅の花盛りを演出する。その日を境に状況は一変した。「あり所は聞けど」、事情は女からも告げ、逢瀬を惜しみ別れた。見えざる強い政略の力に為す術がなかった。

さて、古今和歌集の「月やあらぬ…」の歌の詞書には、「同じく分節して掲げる」

詞書①五条の後の宮の西の対に住みける人に、本意にはあらで、もの言ひわたりけるを、

詞書②正月の十日あまりになむ、ほかへ隠れにける。あり所は聞きけれど、えものも言はず、

詞書③又の年の春、梅の花ざかりに、月のおもしろかりける夜、去年を恋ひて、かの西の対に行きて、月のかたぶくまで、あばらなる板敷に臥せりて、詠める。  
(恋歌五・七四七)

とある。第四段に全文依拠したごとく、①②③の文量の比率も同じである。元の②の「なほ憂しと思ひつつなむありける」を略し、③の歌の前後の「立ちて見、みて見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて」と「と詠みて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣く帰りにけり」を削除した。心情には触れず経緯の説明に留める。③に「月のおもしろかりける夜」と付加したのも然り。元の物語では「月のかたぶくまで」とあるのみで、作為は当初からなかった



はずである。

むしろ、詞書が除いた部分にこそ物語文の本領があるのである。失踪以後一年は「なほ憂し」と思いつつ過ぎたこと、「立ちて見、ゐて見」さまざまにながめ見たこと、「うち泣きて」追憶に耽り「泣く泣く」帰ったこと。未練と執着を言うことに深い情趣と雅致があるのである。

「月やあらぬ…」は古今和歌集の恋歌五の巻頭にある。恋の進行推移の最終の部類（恋の終わった後）であり、恋歌全三六〇首中の二七九番目に当たる——伊勢の語りはつまり恋の終わった時から始まる。試みに、恋歌五巻に収める伊勢物語の歌を通覧するに、勅撰集の採収態度はさすがに偏頗なく端然と整齐している。詞書が情緒性を排するのは他の恋歌においても同様である。左に、古今和歌集の採収歌を一覧する。「歌番号と初句。あとの漢数字は伊勢物語の章段）

恋歌一 476 見ずもあらず・九十九 477 知る知らぬ・九十九 501 恋せじと・六十五 522 行く水に・五十 (計四首)

恋歌二 ナン

恋歌三 616 起きもせず・二 617 つれづれの・百七 618 浅みこそ・百七 620 いたづらに・六十五 622 秋の野に・

二十五 623 みるめなき・二十五 632 人知れぬ・五 644 寝ぬる夜の・百三 645 君や来し・六十九 646 かき

暮らす・六十九 (計十首)

恋歌四 705 数々に・百七 706 大幣の・四十七 707 大幣と・四十七 708 須磨の海人の・百十二 709 玉かづら・

百十八 746 形見こそ・百十九 (計六首)

恋歌五 747 月やあらぬ・四 784 天雲の・十九 785 行き帰り・十九 (天雲の) 807 海人の刈る・六十五 (計四首)

の合計二十四首。これらの歌を伊勢物語の章段ごとにまとめると、「各一首。二首以上は洋数字で示す」

二、四、五、十九<sup>2</sup>、二十五<sup>2</sup>、四十七<sup>2</sup>、五十、六十五<sup>3</sup>、六十九<sup>2</sup>、九十九<sup>2</sup>、百三、百七<sup>3</sup>、百十二、百十八、百十九

の計十五段にわたる。

### 業平の周辺と環境

決定的なその日から「又の年の正月」までむなしく過ぎた。去年のことはただ今年の花と月からの「想起」としてある。梅の花盛りも月齢も去年と同じ頃なのであろう。満月の近づくと上弦の月は夜深くして西に「かたぶく」。十二日月だとすると、月の入りは午前二時頃である。まして長く感じられる一夜である。第八十二段の「十一日の月」は桜の盛りの頃ではあるが、入る月（惟喬親王）を惜しみ留める風情は今の月夜と通じるものがある。

そこで、物語の地の文の暦日表示を検索するに、「正月」は、第八十三段後半と第八十五段の小野訪問の例がある。惟喬親王の落飾は史実では貞観十四年（八七二）七月で、その翌年の雪深い日という設定である。新年は「公事どもありければ」、夕暮れに泣く泣く辞去した。第四段の正月も、除目などの公事多忙の事情を言うのであろうか。

さて要所に暦日を表示する章段は、第八十段「弥生のつごもりに」、第八十一段「神無月のつごもりがた」、第八十三段前半「時は弥生のつごもりなりけり」、第八十四段「師走ばかりに」、第九十一段「弥生つごもりがたに」、第九十六段「その頃、水無月の望ばかりなりければ」、第九十八段「長月ばかりに」など、非常に偏在する。早く第二段に「時は弥生のついたち、雨そは降るに」とあり、「起きもせず…」の歌の「ながめ」を説明する例があった。

右の一群の中に第八十四段の母の話挿んだのは、主人公の孤独な喪失感を増幅する効果がある。業平の母伊都内親王はすでに貞観三年（八六一）九月に没している（六十歳前後かという。古今和歌集雑上・九〇〇）。長岡に一人住み、疎遠にしていたのが悔やまれた。阿保親王とは早くに死別した。承和九年（八四二）の変を密訴した直後であった。内親王の長岡隠居もまた新風ではなく、世に数まえられぬ宮家の、旧習になずむような日々であったのかもしれない<sup>(6)</sup>。しかるにその二十年ほどの間の業平の環境は、およそ惟喬親王と紀名虎一族に親近する必然があった。業平の

妻は名虎の男有常の娘であり、女静子は道康親王（文徳）の更衣であり、惟喬親王と恬子内親王の母である。ところが承和十四年に名虎が没し、四歳の惟喬親王は後見を失った。嘉祥三年（八五〇）に文徳が即位し、惟仁親王（清和）が太子に立った。二十六歳の業平には、亡父の過去の非運やわが在原氏の暗雲が重なり見えたのではあるまいか。有常や藤原敏行らとの親交も以前に増して深まったことであろう。

第十六段に描かれる有常は「心うつくしく」清雅を好む、慎ましく誠実な人物である。十歳年下の業平は敬重礼遇した。天福本の勅物に、承和十一年（八四四）以降の官位歴を列記し、貞観十九年（八七七）卒年六十三とある。「三代の帝」はこの間の仁明・文徳・清和の代であるが、静子は貞観八年（八六六）に没した。「世変はり時移りにければ」とは清和朝の不如意をさすのであろう。とは言え、長年親しんだ妻が去るほどの清貧であったとは考え難い。巧みな演出である。この段は一連の東下りの話のあとにある。やはり物語の展開上、主人公周辺の人物の失意隠退の話を配置したものと思われる。実年代や史実と整合するものではない。

ここに臆説を記すならば、初段の「女はらから」はもしや有常の娘たちを原型にしたものではないかと思う。物語の設定上、初冠の昔男は業平であり、古京の「領るよし」は父母の縁による某であろう（伝領地は奈良市佐保の不退寺付近という）。それに紀氏は、祖は奈良朝以来、船守―勝長―名虎と重臣を出した名族である。春日の里に垣間見を手引きする者があっても不思議ではない——といった背景である。事実とは異なるにしても、「思ほえず、故里にいとほしたなくて」の興趣が話の眼目である。なお付け加えれば、葉子の変に連坐した阿保親王が大宰権帥に左遷されたのは弘仁元年（八一〇）、許されて帰京したのは、平城太上天皇崩御の天長元年（弘仁十五年、八二四）である。この間もなお、上皇の平城宮と諸司は存続し、古京の風趣を留めていた。初段の時代も弘仁年間かその後かを想定可能とし、従って「ならの京」を遙か延暦三年（七八四）長岡京着工より前にまで溯らせるには及ばないのではないか。第二段に、平安京が「人の家また定まらざりける時」とあるのは、そのような前時代をさすのであろう。業平末生以

前のことながら、物語の初期は父祖のありし古京に溯源し、「ならの帝」の万葉遺風に親縁する旧時代から接続しているのである。

\*

色好みの男の終生癒されなかつた激しい恋の痛手。おそらく古今東西、それだけで物語ロマンス文学の必要十分の主題となる題材である。若き日の恋は胸のうちに年古り、時々慕わしい面影を伴って想起される。始めに離絶の悲劇があった。物語はその後の二十年余の変転を集積した年代記である。男の渝らぬ恋と悲哀は、第七十三段の、

目には見て手には取られぬ月のうちの桂のごとき君にぞありける

の歌のように痛切である（万葉集卷四・六三二の流伝歌か）。手の届かぬ君は「月の桂」のごとく高潔清雅である。それにしても地の文に「昔、そこにはありと聞けど、消息をだに言ふべくもあらぬ女のあたりを思ひける」とあるのは、いったい第六十九段以下の齋宮のことをさすのであろうか。それはむしろあとの第七十六段の月宮の人へと連絡するのではあるまいか。けだしこの高子こそは伊勢物語における「永遠の女性」である。

第七十六段や第百段の二条后は、男の心を半ば憐れみ翻弄するがごとくに見える。優位と余裕の心地よささえ感じられる。しかし古今和歌集の「大原や…」の歌の詞書には何の感情も混じらない（雑歌上・八七一）。それは屏風歌や催事の歌でも同様である（秋歌下・二九三素性、二九四業平。春歌上・八康秀、物名・四四五康秀。後撰和歌集、春歌上・一敏行など）。今は姿も心情も垣間見ることは出来ない。女の真実は冷たく閉ざされている。はたして唯一の自作という、

雪のうちに春は来にけりうぐひすの水れる涙今やとくらむ（古今和歌集、春歌上・四）

がその心象風景を物語るかのように、涙も氷る鶯さながらの身上であったのかと想像されるばかりである。

## 付、高子の願経・略注

まことに稀有のことに、藤原高子の願経「不空絹索神呪心経」一巻が陽明文庫に伝存する。もと興福寺南円堂に納めたもので、巻尾の願文（識語）に、

元慶五年五月七日父母式忌夫為菩提書寫已藤原氏女高子

の一行がある。氏と名は自署という。高子の父長良は齊衡三年（八五六）七月に、母乙春は元慶元年（八七七）十二月以前の某日に没した。<sup>①</sup>「式忌」は両親の周忌をいう。従来「式」「忌」などと読み、「忘夫」を亡き夫・清和天皇のことと解したが、天皇を父母と併せて氏寺に供養するというのは疑問である。<sup>②</sup>清和太上天皇は前年十二月四日に粟田山円覚寺において崩じ（三十一歳）、以後は嵯峨水尾の円覚寺（水尾山寺）と縁が深かった。

「不空絹索神呪心経」は大正蔵第二十卷密教部三、No. 一〇九四、唐玄奘訳。神呪陀羅尼の利益と功德を説く。二十種・八法の種々の功德を記し、無病除災、富裕、円満な人間関係から安樂安穩な臨終まで、非常に生活的現実的な利点を述べる。父母の菩提の為とは言え、この内容は四十賀を迎える高子自身の信心と相通するものがあつたのであろう。この年は「天下遇密」<sup>あつみつ</sup>（音曲停止）につき、賀宴は翌六年三月に延期された（三代実録）。

南円堂は弘仁四年（八一三）、高子の祖父にあたる冬嗣が建立し、講堂にあつた不空絹索観音像を移して本尊としてと伝える。大鏡の道長伝の中に、

このおとど「冬嗣」なむ、南円堂を建てて、丈六不空絹索観音を据ゑ奉りたまふ。さてやがて不空絹索経一千巻  
供養したまへり。今にその経ありつつ、藤原の人々取りて守りにしあひたまへり。その仏経の力にこそ侍るめれ、  
また栄えて帝の御後見いまに絶えず。（流布本による）

とある。造像のそもその由縁については、天平十七年（七四五）の牟漏女王の発願を、孝子藤原夫人と藤原真楯が引き継ぎ果たしたとの伝がある。<sup>③</sup>不空絹索観音の信仰は天平期から盛行し、東大寺法華堂の立像が著名である。南円

堂の現存坐像は鎌倉初期の再興である。

これより先、貞観十年（八六八）頃に高子は花山に元慶寺を建立した。三代実録、元慶元年（八七七）十二月九日条に、法眼遍昭の上表により定額寺と為すとあり、今上（陽成）誕生の時に遍昭が発願草創し、以後漸々寺容を整えたという。のち遍昭が住持し、花山僧正と呼ばれた。惟喬親王らとも交流があった（古今和歌集、春歌下・七四）。なお素性は遍昭の在俗時の子（同、秋歌下・三〇九）。後代の花山院の落飾事件があった所として知られる（現在地は京都市山科区北花山）。遍昭は天台僧正。清和天皇が帰依した真言系とは異なる。

## 注

(1) 伊勢物語の構成要素として、このほかに東下り（第七段以下）、伊勢の齋宮（第六十九段以下）、惟喬親王（第八十二段以下）、親族や交友（第八十四段、第八十七段ほか）などの物語群、および類聚的な小群がある。しかしそれらは作品中のある部分に偏在しており、二条后物語のように全編にわたって底流しているものではない。

(2) 「翁」の称は、第七十六段を初見とし、七十七、七十九、八十一、八十三、九十七の諸段に見える。その中に業平の年譜をたどるならば、

貞観八年（八六六）、四十二歳 第七十七段、天安二年（八五八）に没した藤原多賀幾子（文徳天皇女御）の周忌。

十四年（八七二）、四十八歳 第七十九段、在原氏所生の貞数親王の産養。

同 第八十一段、河原院の塩竈。源融左大臣となる。

同 第八十三段、惟喬親王出家。翌年小野を訪ねる。

十七年（八七五）、五十一歳 第九十七段、基経四十賀に歌を詠む。

のごとくである。即ちこの十年間ほどは、高子が女御から御息所、后へと昇りつめ、一方で業平が権門に背を向けて老いく時期である。「翁」とはけだし放縦の遊びを為す貴種の意でもあろう。第八十五段の作者は、十九歳も年下の惟喬親王を「童より仕うまつりける君」と称する。誤解でないとするれば、親王と業平はそれほど長く政治的立場を同じくした主従であったと言っているのであろう。

(3) 注2の高子の行啓についての補足。高子は貞観十二年(八七〇)九月に貞保親王を、その一(一)二年后に敦子内親王を出産した。また十三年九月に五条后順子が、その翌年九月に藤原良房が没した。身重の前後や服喪の間は氏神参拜は行わなかったであろう。三代実録を見ると、とくに貞観(元慶年間は大原野祭や奉幣等の記事が目立って多い。それも良房・基経政権の権勢を語るものである。

(4) 長良の三男基経は仁寿二年(八五二)十七歳で蔵人になり、侍従を経て、天安二年(八五八)蔵人頭となった。長兄の太郎国経は同じ天安二年に三十一歳で蔵人となった。なお第九十七段に、基経四十賀に業平が歌を詠んだとあるのは、約二十年後の貞観十七年(八七五)のことである。

(5) その顕著な例を言えば、次の「狩の使い」の一節がある。傍線部、物語文が男の心情を細叙するのに対して、詞書の方は短く簡要で、ただ「思ひ居りける間に」とあるのみである。

〔伊勢物語第六十九段〕 つとめて、いぶかしけれど、わが人を遣るべきにしあらねば、いと心もたなくて待ち居れば、明けはなれてしばしあるに、女のもとより、詞はなくて、「君や来し」。男、いといたう泣きて詠める。「かき暮らす」と詠みやりて、狩に出でぬ。野にありけど、心は空にて、こよひだに人静めて、いととく逢はむと思ふに、

〔古今和歌集恋歌三〕 業平朝臣の伊勢国にまかりたりける時、齋宮なりける人に、いとみそかに逢ひて、又のあしたに、人遣るすべなくて、思ひ居りける間に、女のもとよりおこせたりける。645「君や来し」。返し、646「かき暮らす」。

(6) 有名な伊都内親王の願文は天長十年(八三三)九月二十一日の日付。伝橘逸勢筆、巻尾に「伊都」の自署がある。母の藤原平子の遺言により、山階寺(興福寺)東院西堂に香燈読経料として墾田荘畠を寄進したことを記す。

(7) 長良は冬嗣の長子、良房・良相の同母兄。権中納言、五十五歳没。乙春は総継の女。三代実録、元慶元年(八七七)十二月十三日、荷前使の班幣五墓を定めた中に、「贈正一位藤原氏墓。在山城国紀伊郡」(長良墓)があり、また延喜諸陵式の「遠墓」の二に「深草墓」とある。元年正月に即位した陽成天皇の外祖父母にあたる。

(8) 古字の「忌」と「忘」はよく似るが、こゝは「忌」。さて「夫為菩提」は「その菩提の為に」と試訓したい。「夫為」は、願文の常用句「奉為」(おほみため)かと疑いもしたが、原字は確かに「夫」である。大藏経データベースによると、「夫為」の文字列は多数見えるが、当の「不空罽索神呪心経」にはない。近年の展覧会図録に、東京国立博物館・NHK『宮廷のみやび 近衛家一〇〇〇年の名宝』二〇〇八年や、京都国立博物館『王朝文化の華 陽明文庫名宝展』二〇二二年などがある。その他、田中塊堂『日本写経綜覧』一九五三年、『平安遺文題跋編』一九六八年など。

(9) 興福寺縁起。藤田経世『校刊美術史料寺院篇上巻』一九七二年による。藤原夫人は聖武天皇の夫人「名闕」。続日本紀に、

天平宝字四年（七六〇）正月に薨じたとある。真楯は冬嗣の祖父にあたる。天平神護二年（七六六）三月薨、五十二歳。初め八束と称した。万葉集に八首入集。彼ら兄妹の亡父母は北家の祖房前と牟漏女王。参考文献、浅井和春編『日本の美術No.382不空羅索・准胝観音像』一九九八年三月。

〔付記〕 伊勢物語の第四段は愛賞すべき古物語中第一の名品である。「本意にはあらで」が明解を得ないが、本段を与謝野晶子が格別称揚していることを最近知った。曰く、「この一段は伊勢のなかで、叙情の文として最も優れた所と思ひます」。栗島狭衣著『詩人業平』に付載する「伊勢物語評話」の中の明言である。明治三十四年（一九〇一）十二月、鳴皇書院刊。晶子二十四歳、六月に出奔し、八月に『みだれ髪』を出版した年である。この「評話」は初段、第二十段に就いての、落合直文、鳳晶子、鉄幹、栗島ら八人の座談記録、全三十五頁。本段を、鉄幹がまとめて歌も文章もうまいと評している。なお「本意にはあらで」は、晶子によれば「行きとぶらふ人は志が深かつたのですけれど、女は心ゆかぬさまであつた。そのほいでは御座んすまいか」という。随一の后が、ねである藤氏の姫君に男の志が深く、かえって姫君方でその志に應對しかねるさまであつた、と三言うのであろうか。

（二〇一八年十一月五日）